

**Comparison between Japanese “-te -ta” and “-to -ta”
Complex Sentences**
— **Based on the Survey on Their Improper Use among
Japanese Language Learners in China** —

Yukiko MURAMATSU

LIU Wei*

*Tian Jin University

The purpose of this paper is to treat the differences in the use of the Japanese “-te” and “-to” complex sentences. For this study, a survey was first prepared on the improper use of “-te” and “-to” among Japanese language learners in China; it demonstrates the difficulty for Chinese learners to properly use these constructions. Subsequently, in this paper, the transposition of “-te” and “-to” are classified into three cases, which clarifies the conditions for their transposition.

日本語複文“～て～た”と“～と～た”の比較分析 —中国人日本語学習者の誤用を踏まえて—

村松 由起子 劉 偉*

(*天津大学)

1. はじめに

「～て」「～と」の形式には、前件が後件に先行して生じる時間的継起を表す用法があり、次の(1)のように両形式とも使用可能な場合がある。

- (1) a. 田中さんはボーナスをもらって旅行に出かけた。
b. 田中さんはボーナスをもらうと旅行に出かけた。

一方、(2)のように「～と」が使えて「～て」は使えない場合もある。(2)bの「～と」は森田(1980)が「～て」に置き換えることができないとしている例である。

- (2) a. *飛行機が止まって、安全ベルトをはずした。
b. 飛行機が止まると、安全ベルトをはずした。(森田の例)

森田は「～と」が「～て」に置き換えられない場合について「現実の具体的な場面における行為であるが、前後件が同一主体の行為で一貫せず、「Aが……すると、Bが……した」と主体に交替が見られる場合には「て」に置き換えることができない」と説明している。次の(3)aの「～て」を用いた文は実際の中国人学習者の誤用であるが、bのように「～と」にすると適格文になる。

- (3) a. *加藤さんがそばにあったカセットをレコーダーに入れて、函館の女という歌が聞こえてきました。
b. 加藤さんがそばにあったカセットをレコーダーに入れると、函館の女という歌が聞こえてきました。

この例では、前後件が同一主体でないため「～て」に置き換えることができない、という森田の説明が可能である。

しかし、(4)のように、前後件の主体が異なるにもかかわらず、「～て」「～と」の両方の形式

が使用できる場合もあることから、時間的継起を表す「～て」「～と」の違いについては、さらに詳細な考察が必要であると考えられる。

(4) a. ドアが開いて、たくさんの客が店内に入ってきた。

b. ドアが開くと、たくさんの客が店内に入ってきた。

本稿では、時間的継起を表す「～て」「～と」の使用について、実際の中国人学習者の誤用を調査し、この両形式の使い分けに問題があるか否かを確認した上で、両形式の相違点を検討していく。

なお、「～て」「～と」には時間的継起以外にも用法があるが^{注1)}、本稿では時間的継起のみを扱い、後件はタ形の「～て/と～た」の形に限定して考察する。タ形に限定するのは、「～と」形式の後件をル形にすると繰り返しや習慣的な解釈が想定されやすくなるからである。

2. 中国人学習者への調査

先の(3)で示したように、中国人学習者には時間的継起を表す「～て」「～と」の使い分けに関する誤用が見られる。そこで、時間的継起を表す「～て」「～と」の使い分けに関する誤用が実際にどの程度生じやすいかを確認するため、中国人学習者に対して「～て」「～と」の文が成立するか判定してもらう形式で、調査を行った^{注2)}。今回の調査では、天津理工大学の日本語学科三年生15名の協力を得た。日本ではなく中国で学ぶ学習者を調査対象としたのは、彼らは中国の大学という、日常生活の中で日本語に接する機会が少ない環境で学習しているため、教科書で学習した日本語文法の知識がそのまま判定に反映されやすいと考えたからである。今回は10の文について「～て」「～と」の組み合わせで文を判定してもらったが、そのうち1組は後件がル形であり、本稿の考察の対象外なので、残りの9組について検討していくことにする^{注3)}。9組の調査文とその判定結果を表1に示す。自信のない判定が混ざらないようにするため、選択肢には「使えるかもしれない」「わからない」を加え、4択とした。なお、使用した調査文には先行研究の例文及び一部修正を加えた例文も使用している。

調査文	使用可	使用不可	使えるかもしれない	わからない
1a. ドアが開いて、たくさんの客が店内に入ってきた。	7	7	0	1
1b. ドアが開くと、たくさんの客が店内に入ってきた。	10	4	1	0
2a. 右へ曲がって、郵便局があった。	10	3	1	1
2b. 右へ曲がると、郵便局があった。	4	8	3	0
3a. 会社を出て、雨がやんでいた。	7	3	4	1
3b. 会社を出ると、雨がやんでいた。	6	8	1	0
4a. 試験が終わって、ほっとした。	6	3	6	0
4b. 試験が終わると、ほっとした。	8	5	2	0

5a. 道を歩いていて、雨が降り出した。	8	5	2	0
5b. 道を歩いていると、雨が降り出した。	4	9	1	1
6a. ドアをノックして、女の人が出てきた。	9	3	2	1
6b. ドアをノックすると、女の人が出てきた。	4	6	5	0
7a. 音楽が鳴って、司会者が出てきた。	9	2	4	0
7b. 音楽が鳴ると、司会者が出てきた。	8	3	4	0
8a. 戸締りをして、玄関の鍵を掛けた。	8	5	1	1
8b. 戸締りをすると、玄関の鍵を掛けた。	7	7	0	1
9a. 飛行機が止まって、安全ベルトを外した。	11	3	1	0
9b. 飛行機が止まると、安全ベルトを外した。	8	4	3	0

表 1

表1の選択者数を見ると、多くの文で学習者の判定が分かれていることがわかる。1～9のうち、2の判定は比較的やさしいだろうと予測していたが、実際には誤った判定が多く、「右へ曲がって郵便局があった」を使用可能と判定した人が10名、「右へ曲がると郵便局があった」を使用不可能と判定した人が8名見られた。今回の調査では、誤った判定が多かった要因までは定かでないが、初級の教材^{注4)}を確認してみたところ、「～と」の例文はすべて「右へ曲がると郵便局があります」のように後件がル形であり、「～と～た」の形には触れられていないことも影響しているのかもしれない。

その他8組の文についても、使用可、使用不可の判定にばらつきがあることから、時間的継起の「～て」「～と」に関しては誤用が生じやすい傾向があると考えられる。

では、次に、前後件が異主体であることが誤用傾向と関わりがあるかという視点から考察してみる。1～9で前後件が同一主体なのは8のみで、その他は異主体である。ここで、誤用傾向を探るため、調査文ごとの正解率を見ることにする。

表2は9組18の文を正解率の低い順に並べたものであり、*はその文が不適格文であることを示す。例えば「2a * 20%」というの、不適格文2aを不適格と正しく判断した人が20%であることを示す。表2を見ると、もっとも正解率の高かった1bでも67%であり、18文中13文が50%以下と全体的に正解率の低いことがわかる。この中で前後件が同一主体なのは8のみで、それ以外は異主体であるが、異主体のうち、1、4、7は比較的正確率が高く、2、3、5、6、9^{注5)}は低い。この前者のグループ、後者のグループにはそれぞれ共通の特徴がある。前者は異主体でありながら、「～て」「～と」ともに成立するのに対して、後者は「～と」のみ成立し、「～て」が不適格文である点である。つまり、前後件が異主体の場合でも「～て」を適格と判断する傾向があるため、必然的に両形式が成立する前者の正解率が高く、後者の正解率が低くなっていると考えられる。

また、正解率の低い上位にaの「～て」形式で且つ不適格文が多いことから、「～て」が使用できない場合に使用可能と判断しているのがわかる。

2a *	20%
3a *	20%
6a *	20%
9a *	20%
2b	27%
5b	27%
6b	27%
5a *	33%
3b	40%
4a	40%
1a	40%
8b	47%
4b	47%
7b	53%
8a	53%
9b	53%
7a	60%
1b	67%

表 2

しかし、「～て」のみ誤用が生じやすいわけではなく、2b、5b、6bの「～と」の文についても正解率が27%と低いことから、「～と」については適格文を使用不可能と判断してしまう傾向が見られることがわかる。

一方、同一主体の場合については、8aが53%、8bが47%と、今回の調査文中では比較的正解率が高いことがわかった。8は「～て」「～と」の両方が成立するので、この点では異主体の比較的正解率の高い1、4、7と共通しているといえる。

以上、今回の調査から、「～て」については、使えないのに使ってしまう傾向が、「～と」については使えるのに使えないと判断してしまう傾向があり、誤用が生じやすいことが確認できた。

3. 時間的継起を表す「～て」「～と」

次に「～て」「～と」の先行研究を概観し、その中の時間的継起に関わる用法についてまとめておく。

まず「～て」の用法から見ていく。森田(1980)は「～て」を「並列」「対比」「同時進行」「順序」「原因・理由」「手段・方法」「逆説」「結果」の8つの用法に分けている。以下は森田の例の一部である。

- (5) 彼女は背が高く、目が丸くて、髪が黒いんだ(並列)
- (6) 日本海側は雪が降っていて、太平洋側は晴れています(対比)
- (7) 飛行機が煙を吐いて墜落した(同時進行)
- (8) 学校へ行って、先生に会った(順序)
- (9) 花瓶が棚から落ちて割れた(原因・理由)
- (10) 大いにがんばって、仕事を全部すませた(手段・方法)
- (11) 毎日徹夜して病気にならないなんて、スーパーマンだね(逆説)
- (12) 彼が参加して五人になる(結果)

このうち、時間的継起を表すのは「順序」と「原因・理由」である。「原因・理由」について森田は「作用の生起の時間的な面だけを眺めれば“順序”であろう。しかし、前件の作用や動作・状態が生じた結果、後件の動作や状態が必然的に引き起こされるという“順次性”は、見方によっては“原因・理由”の因果関係である」とし、「前の動作が終わったことによって次の結果が生じたという意識が強調されれば“原因・理由”となる」^{注6)}と述べている。

また、庵他(2000)でも継起か因果関係かについて、「[PでQ]は二つの出来事が起こったということを表すだけであり、それが継起と因果関係のどちらを表すかはPとQの関係」^{注7)}によるとし、(13)は継起と解釈されるが、(14)は因果関係的だと述べている。

- (13) 歯をみがいて寝た。
- (14) 歯をみがいて口の中がすっきりした。

つまり、「～て」が「原因・理由」を表すかは前件と後件の関係によることになる。

また、仁田（1995）は節を形成する動詞のタイプや二つの主体のあり方から「継起」を「時間的継起」と「起因的継起」に分け、「時間的継起」は「シテ節の事象と主節の事象との生起が、単に時間的な先行関係にあるだけ」であるのに対して、「起因的継起」は「シテ節で表される先行生起している事象が、主たる事象の生起にとって起因的に働いている」^{注8)}と説明している。主体については、「起因的継起」のほうが「時間的継起」よりも異主体の出現率が高くなるとしながらも、両継起とも異主体の文が存在することを示している。以下は仁田の「時間的継起」と「起因的継起」の例である。ここではそれぞれ同一主体、異主体の例を一例ずつ挙げておく。

(15) それからあなたは眼鏡をはずして泣きはじめた。(時間的継起で同一主体の例)

(16) このとき、エレベータが停止して、ドアが開いた。(時間的継起で異主体の例)

(17) 私は恐ろしくなって思わず眼を伏せたくらいだった。(起因的継起で同一主体の例)

(18) 曇天から薄日がさして蒸し暑かった。(起因的継起で異主体の例)

そして、この異主体の場合については、「共に非情物であったりシテ節の主体が非情物であるのが、普通である。異主体が共に人間であったり、制御可能な事象である場合は、「太郎ガヤツキテ、次郎ガ帰ッテイッタ。」が示すように、事象の独立性が高くなり、＜並列＞的に解釈されるのが普通である」^{注9)}と述べている。このような、主体によって「～て」の表す解釈が異なる点は、中国人学習者による「～て」形式が成立するか否かの判断を難しくしている要因かもしれない。

仁田はさらに、「起因的継起」のほうが「時間的継起」よりも異主体の出現率が高くなる理由として、「＜起因的継起＞では、シテ節が表す副次的事象は、主たる事象出現の起因であり、したがって、主たる事象からの自律性を比較的高く保つことができる。それが、＜起因的継起＞に異主体の存在を比較的多く許す基因であろう」^{注10)}と分析している。

つまり、前後件に起因的關係があり、前件の主体が非情物である場合は「～て」による異主体でも成立しやすい、ということになる。

では、次に「～と」の用法をまとめておく。

「～と」については、「ば」「たら」「なら」とともに条件文としての枠で扱われることが多く、中でも「たら」との違いが注目されてきた^{注11)}。初級でも「たら」との比較から、「～と」の後件には意志、希望、命令、依頼などの表現が使えない点が説明されることが多い。以下は初級教科書の例文であり、これらには「～と」の代わりに「～たら」を使うとしている^{注12)}。

(19) ×時間があると、映画を見に行きます。

映画を見に行きたいです。

映画を見に行きませんか。

ちょっと手伝って下さい。

グループ・ジャマシイ編（2001）によると、「～と」には「一般条件」「反復・習慣」「仮定条件」「確定条件」「…とすぐ」「前置き」の用法がある。このうち、「～と～た」の形が示されているのは「特定の人やものの過去の習慣・動作の反復」と「確定条件」であり、「確定条件」にはさら

に「契機」と「連続」がある。以下、例文を一例ずつ挙げておく。

(20) 日曜日に一家で買い物に出ると、必ずデパートの食堂でお昼を食べた。(反復・習慣)

(21) 教えられたとおりまっすぐ行くと、つきあたりに郵便局があった。(契機)

(22) 男はめざまし時計を止めると、またベッドへ戻った。(連続)

「連続」については「同一の行為者」とし、「前後とも意思的動作」であるとしている。そして、この用法は「～て」で言い換えられるが、「～て」から「～と」への言い換えはいつも可能だとは限らないとし、(23)の三つ以上の動作の連続を例に挙げている。

(23) a. 家に帰って、ご飯を食べて、すぐ布団に入った。

b. *家に帰ると、ご飯を食べると、すぐ布団に入った。

そして理由として、「テ形は同一の場面で連続する動作を表すのに対して、「と」は場面を二つに分けて、第一の場面から第二の場面に切り替わる時に起こる変化を外から描写するような場合に用いるものだから」^{注13)}と述べている。

先行研究の中には、田中(2004)や庵他(2001)のように、「～て」「～と」を比較している述べているものもある。田中(2004)は「「ト」が事態発生の時点をあらかず場合、具体的に時間指定や継起の「トキ」や「テ」に近い性質を持つ」とし、次の例を示している。

(24) 冬が {来たとき / 来ると / 来て}、私は急きょ国に帰らなければならないことになった。

(25) 朝 {起きると / 起きて / 起きたとき}、30分ジョギングをすることにしている。

「これらは時間の前後における事実関係をあらかず事態の継起用法であるが、トの例は「PするとすぐQ」とする事態間の変化移行が迅速で、一体的な記述の印象を与えている。事実関係は文脈によっては「ことにしている」という習慣的な行為の反復を含意することもある」^{注14)}としている。

庵他(2001)は「～と」と「～たら」の比較説明の中で「～て」についても触れ、前件と後件が連続する動作・出来事の場合「～と」は使えるが「～たら」は使えず、また、主語が一人称の場合は「～と」も使いにくいとしている。

(26) 昨日私は家に {?帰ると / ×帰ったら / ○帰って} すぐ寝た。

また、蓮沼(1993)は「～たら」との比較で「～と」の制約について「事実的な「と」は、前件の事態が成立した状況における、後件の事態の成立、あるいはそれに対する認識の成立を、話し手が外部からの観察者の視点で語るような場合に使用される」という仮説を立て、(27)(28)(29)で「～と」が不自然な理由を、「後件の事態が前件の事態が成立した状況と同一の場面で、外部から客観的に観察できない」^{注15)}からだとしている。なお、(27)(28)(29)は豊田(1982)^{注16)}の例文を蓮沼が適格性を判断して引用したものである。

(27) 毛のセーターを洗濯機で {洗ったら / ??洗うと} 着られなくなった。

(28) 昨日10キロ {走ったら / ??走ると} 2キロやせた。

(29) きょう、この薬を {飲んだら / ??飲むと}、よく効きました。

以上、「～て」「～と」の用法を概観してきたが、本稿ではそれぞれの時間的継起の用法を次の

ようにまとめておく。

時間的継起を表す「～て」は前後件の主体が同一のことが多いが、前件が非情物で起因的継起を表すときには、異主体が使用できる場合もある。また、「～て」の文で表される因果関係は「～て」によってではなく、前後件の関係によって生じている。

一方、時間的継起を表す「～と」は事態間の変化を外から描写しており、前後件のふたつの事象は一体的に生じている。

4. 「～て～た」と「～と～た」の比較

時間的継起を表す「～て」と「～と」の両者を比較すると、次の3つの場合に分けられる。

1. 「～て」が使えて「～と」が使えない場合
2. 「～て」「～と」の両方が使える場合
3. 「～て」が使えず「～と」が使える場合

以下、この3つの場合に分けて順に述べていく。

4-1. 「～て」が使えて「～と」が使えない場合

まず、先行研究で指摘されている「～と」が使えない場合を整理してみる。先にも述べた蓮沼(1993)では「前件の事態が成立した状況と同一の場面で話し手が外部から客観的に観察できないような事態を後件が表す場合」には「～と」が使えないとしているが、庵他(2001)の「前件と後件が連続する動作・出来事で主語が一人称の場合」という制約も一人称は客観的な観察がしにくいことから、蓮沼の指摘に該当する。

次の(30)は主語が一人称であり、また、風邪を引いた時点での客観的な事態を述べてはいないので「～と」が使いにくい。

(30) a. 風邪を引いて休みました。

b. ?風邪を引くと休みました。

aは自然であるが、bは不自然さを感じる。aの場合は一回限りの出来事でも使用できるのに対して、bは過去における反復の解釈が自然になる。例えばaには「昨日」という特定の時間を付加することができるがbには付加することができない。一方、「子どものころ」など過去の反復であればabとも付加することができる。ただし、その場合、「よく」など反復を表す表現を加えたほうがより自然になる。

(31) a. 子供のころは風邪を引いて(よく)休みました。

a'. 昨日は風邪を引いて休みました。

b. 子供のころは風邪を引くと(よく)休みました。

b'. *昨日は風邪を引くと休みました。

では主体が一人称でない場合はどうであろうか。次の(32)は前後件が無意思的な出来事である

が、やはり「～と」は使いにくい。(30)と同様、bは出来事ではなく、過去の反復としての解釈が自然である。

(32) a. 台風が来て停電になった。

b. ? 台風が来ると停電になった。

この場合、「台風が来る」と「停電になった」とは因果関係が生じているが、「台風が来るといつも停電になる」というわけではないので、「～と」でこの二つの出来事を結びつけるのは難しいと考える。状況説明を補って「今回も」などを加えれば、必然的にそうなるという解釈が可能になり、「～と」も自然になる。

(33) この辺は落雷が多いので、今回も台風が来ると停電になった。

また、庵他が主語が一人称のために使いにくいとしている(34)aについても、「疲れていたのだから」などの理由をつけて「家に帰る」と「すぐ寝た」ことの因果関係の強さを補えば「～と」も自然な表現となる。

(34) a. ? 昨日私は家に帰るとすぐ寝た。

b. 昨日私は疲れていたのだから家に帰るとすぐ寝た。

一方、「～て」は、前後件に因果関係がある場合に用いることができ、その因果関係は前件と後件の関係によって必然的に生じるものであって、関係が弱い場合には単なる時間的前後関係として解釈されるだけなので、ここで述べた「～と」が使えない場合でも使用することができるのである。

このように、時間的継起が原因・理由を表す場合に「～と～た」の形を用いると、過去の反復・習慣に解釈されて、時間的継起としては使用するのが難しい。ただし、前件の結果、後件が必然的に発生するような状況を補って説明すれば「～と」の使用も可能になると考える。

4-2. 「～て」「～と」の両方が使える場合

この場合は、「～て」「～と」の言い換えが可能である。言い換えが可能かについて、先行研究では主体が問題にされていることから、ここでは前件、後件の主体が同一か否かによって例文を分けてみていくことにする。

時間的継起で、前後件の主体が同一の場合は以下の例のように「～て」「～と」ともに使用可能である。

(35) a. 彼は立ち上がって外出の支度を始めた。

b. 彼は立ち上がると外出の支度を始めた。

(36) a. ドングリはころころと転がって、池に落ちた。

b. ドングリはころころと転がると、池に落ちた。(中上級)

(37) a. 私は東京駅に着いて、その足で会社へ向かった。

b. 私は東京駅に着くと、その足で会社へ向かった。(日文)

(38) a. 着物を着て、出掛けた。(日文)

b. 着物を着ると、出掛けた。

また、時間的継起で、前後件の主体が異主体の場合でも、以下のように「～て」「～と」ともに使用可能な場合がある。しかし、次の4-3で示すように、異主体の場合は「～て」が使えない場合も見られる。

(39) a. 子どもが生まれて、家がにぎやかになりました。(庵他の例)

b. 子どもが生まれると、家がにぎやかになりました。

(40) a. ドアが開いて、たくさんの客が店内に入ってきた。(4)の再掲

b. ドアが開くと、たくさんの客が店内に入ってきた。

(41) a. 音楽が鳴って、司会者が出てきた。

b. 音楽が鳴ると、司会者が出てきた。

(42) a. 前のトラックが右折して、前方がよく見えるようになった。

b. 前のトラックが右折すると、前方がよく見えるようになった。

先の4-1では因果関係が弱い場合には「～と」が使いにくいことを示したが、(43)aのようにはっきりした因果関係がある場合には状況説明を補わなくても「～と」を使用することが可能である。

(43) a. 歯をみがいて口の中がすっきりした。(庵他の例)

b. 歯をみがくと口の中がすっきりした。

さらに、「～て」「～と」の両方が成立しても、以下のように、解釈される状況が一致しない場合もある。

(44) a. 曇天から薄日がさして、蒸し暑かった。(仁田の例)

b. 曇天から薄日がさすと、蒸し暑かった。

aは「薄日がさしているのだから」という状態もしくは理由として解釈されるが、bは「薄日がさしたりささなかつたりしている中で、薄日がさす時」という解釈になる。このような場合、「～て」「～と」ともに使用することはできても、言い換えはできない。

以上から、前後件が同一主体か異主体かよっては「～て」「～と」の言い換えの成立を判断できないことがわかる。

4-3. 「～て」が使えず「～と」が使える場合

ここに該当するのは、ほとんどが異主体である。次の(45)は同一主体の例だが、この場合、「～て」と「～と」では解釈が一致しなくなる。

(45) a. 私は街へ出て花を買って、妻の墓を訪れようと思った。

b. 私は街へ出て花を買うと、妻の墓を訪れようと思った。(田中の例)

aは花を買う前から墓を訪れるつもりであってもいいのに対し、bは花を買ってから訪れるつもりになったと解釈されるであろう。

次に、以下、異主体の例を挙げておく。

- (46) a. *右へ曲がって郵便局があった。
b. 右へ曲がると郵便局があった。
- (47) a. *会社を出て雨がやんでいた。
b. 会社を出ると雨がやんでいた。
- (48) a. *フタを開けてバネ仕掛けで人形が飛び出した。(異主体としては使用できない)
b. フタを開けるとバネ仕掛けで人形が飛び出した。(田中の例)

(48)については人形が自分でフタを開けたという解釈であればaも使用可能であるが、bでは人形以外の動作主が存在しており、bと同じ解釈ではaを使用することはできない。

これらに「～て」を使えない理由については、構文論グループ(1989)の以下の指摘が考えられる。構文論グループは「～て」を第二なかどめと呼び、ふたつの動作のし手は、同一であることが圧倒的に多いが異なっている場合もないわけではなく、「じっさいには、し手のことなるばあいでも、ふたつの動作はなんらかのし方でたがいにかたくむすびついていて、よりたかいレベルでの複合性、ひとまとまり性をたもっているようである」^{註17)}と述べている。つまり、異主体で「～て」を使用するには、前後件のひとまとまり性が必要だということになる。(46)(47)(48)では、前件の主体として一人称が想定されるが、後件の出来事は「私」の意図や予期しているものではなく、この点からひとまとまり性は低いといえるため、「～て」が使えないのであろう。さらに、仁田が指摘しているように、前件の主体が非情物でなく人間であることもこれらの文が使にくい理由だと考える。

次は構文論グループが異主体でもひとまとまり性があるとしている例である。

- (49) 自動車のドアがしまる音がして、発車していくエンジンの音がきこえた。

なお、(49)のようにひとまとまり性のあるときは、上述の4-2の言い換えが可能な場合に当てはまる。逆に、異主体でひとまとまり性がない場合は、(46)(47)(48)のaのように「～て」を使用することができないといえる。

5. まとめ

本稿では、時間的継起を表す「～て」「～と」について、実際に中国人学習者を対象に調査し、両形式に関して誤用が生じやすい傾向が見られることを示した。特に、「～て」が使用できないのに使用してしまう、「～と」が使用できるのに使用しない、という二つの傾向があることが判明した。

また、先行研究を踏まえて「～て」「～と」を比較することで、前後件が同一主体か異主体かによっては両表現の言い換えの成立を決められないこと、そして、「～と」については前後件に因果関係がありながらもその関係が弱い場合には使いにくく、「～て」については前件が人間の異主体で且つひとまとまり性がない場合には使いにくいこと、を明らかにした。

注

- 注 1) 「～と」の用法としては「一般条件」「反復・習慣」「仮定条件」「確定条件」などが、「～て」の用法としては「付帯状態」「継起」「並列」などがある。仁田 (1995)、グループ・ジャマシイ編 (2001) 他を参照。
- 注 2) 今回の調査では判定が可能な日本語能力を考慮し、中級以上を対象としたが、劉が所属する天津大学には日本語を専門とする学科がなかったため、天津理工大学の日本語学科の学生に協力を依頼した。また、今回は同じ学習経験を有する学生が対象だったため、本調査で得られた結果をそのまま中国人学習者の傾向として一般化することはできないと考える。
- 注 3) 後件がル形の 1 組は以下の文である。
10a. しょうゆをつけて、食べる。
10b. しょうゆをつけると、食べる。
10a は初級の教科書で提示されている基本的な用法である。学生の文法力を確認する目的で調査文に含めることにした。その結果、10a は誤った判定をしたものはおらず、習得していることが確認できた。一方、10b については「しょうゆをつければ食べる」のように条件として解釈され、a とは解釈が異なることも影響していると思うが、使用不可能とした人が 9 名いた。
- 注 4) 「みんなの日本語初級 I」及び「翻訳・文法解説」
- 注 5) 9 については a が 20%、b が 53% と ab で正解率に差がみられたが、片方が低かったため、ここでは正解率が低いグループに入れた。
- 注 6) p.316
- 注 7) p.202
- 注 8) p.104,p.110
- 注 9) p.108
- 注 10) p.116
- 注 11) 加藤 (1998)、庵他 (2001) など
- 注 12) 注 4 の第 23 課
- 注 13) p.291
- 注 14) p.101
- 注 15) p.85
- 注 16) 豊田豊子 (1982) 「接続助詞『と』の用法と機能 (IV)」『日本語学校論集』9 号
- 注 17) p.43

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 加藤理恵 (1998) 「「時」を表す「たら」と「と」について」『日本語教育』第 97 号 日本語教育学会
- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 言語学研究会・構文論グループ (1989) 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学 2』言語学研究会 むぎ書房
- 田中寛 (2004) 『日本語複文表現の研究 接続と叙述の構造』白帝社
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究 (上)』仁田義雄編 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」『日本語の条件表現』益岡隆志編 くろしお出版

南不二男（1997）『現代日本語研究』三省堂
森田良行（1980）『基礎日本語2－意味と使い方』角川書店

例文出典の略

日文：日本語文型辞典
中上級：中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック